

『非毛沢東化』を進める中国にとって鄧小平(右)の『文選』は実務のお手本である



『鄧小平文選』と『毛沢東選集』

去る七月一日の中国共産党創立記念日に北京の人民出版社から『鄧小平文選』が発売されて以来、中国では、一種の鄧小平ブームがつくられて

東京外国語大学教授 中嶋 嶺雄



いる。

『人民日報』が連日、『鄧小平文選』の紹介や解説に大きなページをさいているのみならず、軍の有力者も一斉に鄧小平をたたえはじめた。

七月四日付の『人民日報』が「偉大な転換、卓越した貢献」と題する李德生・瀋陽部隊司令官の鄧小平礼讃論文を掲げたのに次いで、七月二六日付『解放軍報』では、余秋里・人民解放軍総政治部主任が『鄧小平文選』のなかの一〇編の文章を今日の時代の軍隊建設にかんする「重要思想」と絶讃した。

しかも、その前日の七月二五日には、『鄧小平文選』を「中国独自の社会主義を建設するための建国の大綱」だとする中国共産党全国宣伝工作会议の決定が『人民日報』紙上で大々的に報じられた。

全国宣伝工作会议といえど、かつて毛沢東が同会議で一九五七年三月におこなった講話が、文化大革命の開幕期に初めて公表され、『毛主席語録』にも大幅に収録され

て、文革の綱領的文書の一つになったものである。

私も最近、『鄧小平文選』を一読したが、それは、鄧小平が一九七五年から昨年九月までにおこなった四七編の演説や談話から成っていて、今日の「四つの現代化」の時代にふさわしい内容のものばかりであり、「わが国の社会主義事業発展の過程での基本的問題を正しく解決した」(李琦論文『人民日報』七月一日)との讃辞もそれなりにうなずける。

カリスマ化は排す

同じ人民出版社から刊行されてきた『毛沢東選集』のほうは、一九五七年までを扱った第五巻が華国録時代に刊行されて以後、続刊の気配さええないのに、『鄧小平文選』のほうは、まさに現在の時代を語って光彩を放っている。

非毛沢東化が進捗中の今日、一九五七年以降の「大躍進」・人民公社政策や文化大革命に関する毛沢東の著作が重視されるはずはなく、従って『毛沢東選集』はおそらく当

分、未完成のままであろう。

だが、同時に、かつて毛沢東時代には、「反革命分子」だとされた鄧小平の論著がかくも大々的に礼讃されるとなると、「これは危ない。これでは毛沢東万歳と同じではないか」と将来を危ぶむ声が中国内部はもとより、外部世界にも多いのは当然であろう。

そして、そのような危惧をもつとも、強く抱いているのが、鄧小平自身であることもいうまでもない。激動の中国政治に身をさらして浮沈を繰り返し、ついに今日にいたった鄧小平は、いま、みずからの死後に中国の政治状況が再び逆転する危険を誰よりも恐れている。それだけに、鄧小平としては、「鄧小平思想」の生成といったカリスマ化をあくまでも排し、もっぱら実務の二本として『鄧小平文選』を位置づけようとしている。この手本をかざして、いよいよ本格化する全中国的規模での整風運動、つまり地方末端にいたる非毛沢東化に着手しようとしているのだ。